



**BATTLE
FUCKERS** Vol.5+6
-IBU O- -KARI O-

「くんの口淫術……とくと味わって……」

「うおおーそんな口をすぼめして……」

「ひょっとして……みたらに肉棒に吸い付らして……でっか……」

「じゅっぽーじゅぽーじゅぽー……」

「んっ……なんてぶっといチンポなの……？ 頬が外れそう」

「これがくんの尻……の尻……？……力を抜くと魂まで持っていかれそう……」

「じゅぶーじゅぶぽー……じゅぶぶー……」

「ああん、もう……イキなくなったら……いっつでもイッて……」

トビユ

トビユ
トビユ!





「くノ一は手先も器用なんだよ〜ほらほら」
「くのおおー裏筋からカリ裏まで……」

手が何本もあるように思っ〜てくるんじやら〜」

「ら〜んら〜んからマラでも、両手でし〜し〜かれちや我儘どまならん〜」
「〜ん〜ん〜ん〜」

「ほらほら、金五郎のほら〜しちやいらなわら〜」

トビコ

ビュル!

ビュ!





「あんたのカウパー汁がいい潤滑油になって、すっぴい昔してるよー!」
「こゝ、こんな珍妙な淫術も使えるんかあ!」
「んっ!んっ!んっ!しかし何よ!」のデカチン!

「二回も射精したのに、全然柔らかくならんらいじゃな!」
「」の足の裏から来るシツとした臭いもく〜」の淫術か?」
「うるさいわね!早くイッてよ!」



エッ!
エッ!
エッ!

エッ!
エッ!
エッ!
エッ!



「ほらほら、「こうやってオッパイで擦られるの、期待してたんでしょう？」

「おおーなんとという柔らかい乳じゃーハリと弾力もあって、見事じゃあー！」

「根元からカリ裏まで丹念に擦ってあげるから、早く出してよねー！」

「乳と乳が餅のようになしの愚息に吸い付いて、

「この乳圧……たまらんのうー！」



ド'エ'

ド'エ'!

エ'!

「ほら、これでとどめよーんんっー！」

「くさくさなー」の藤田「すくじでも射撃ついでまらねんじやー」
「んんっー」のチンポ、なんて太さなの？

……うう、オマンコ広がって戻らなくなりネン」

「そう言いながら、わしの逸物を全部啜えろとは、

お主相当訓練してるなー！」

「んんっーんしよっーはあっーんんっー！」

……ん、んんっーもっーんんっー？ 精進しなよー！」



ド
ビュ!

ド
ビュ

ビュ!

「みんなたわわに乳って、牛みたいな女キてやるッー」

「あんーちよつとやめてよー乳ッーしてんだからー」

「これだけのデカパイなら、栄養満点の母乳がらっぱら田んぼ、

せがれがでっかな男に育ちそうじゃー」

「な、なに勝手な言ってるのよーあんたの子供なんか産まないからねー

私は素敵な出会いを求めているのー」

「そんな」と言っしてるのも今のうちだけじゃ。必ず種付けしてやるぞー」





「わしの逸物、ぶらじやあー」

「んんーちゅっぽーちゅっぽーんーーじゅんじゅんー」

「おおおー覗みつけてきて……らら目をこけるのんー」

昔から男にはチャレン、おなはチレンと決まっておるんじやあー」

「ナニ訳わかんはい」ときを……んーちゅぶーくぽーーちゅっぽー」



ドビュ

ビュ!

ビュッ

ビュ!

「よっしゃー！大一番じゃー！」

種付け開始じゃあー！肉と肉のがっぶり四つじゃああー！」

「ちよっと両手掴まないでよー！」

「しかし尻もいい尻をしてるのうー！わしの愚息も満足してっじゃ。

それじゃ……はっけよ、い、よらっしょーっ！」

「あああんっ！ぐっ……なんてピストンなのー？

はあああああっん！ー！腰抜けそうになるっ！」

「がはは！関取は足腰鍛えとるんじゃー！」





ドッ
ドッ

ゴッ

「さすがくノーじゃーケツメドもたまらんのうー！」

「ああんーそんなに広げて……ズンズン突かないでえー！」

「がっははー生意気なオナゴもケツメド突けばかわいいもんじゃのうー！」

「あっーあっーあっーああんっー！」

「アナルジーンジーンして、またイっちゃうー！」





トビ

ビヨル!

ビヨル!

「ほらほらーっっかりケシメドシメかえっ、」

またホト「千種を田をわてっまっせーっ」

「だからっでアナルはもうやだー感じすぎておがっくなくなっちやっつっ」

「しかし乳も尻も、本当に艶めかしい身体じやのっ」

くっをやめて遊女にでもなったらぶっつっやー」

「はあんーもう、やめてえーアナルめくれるまでピストンしないでえー」





トビキルル!

ビュ!

「おらあー！どうじゃー！まだ孕まんかあー！」

「あんっー！なんて性欲なのー？底なしー？」

「まだセックスできるなんて、どんちゃん以上の金玉だよお」

「まだ孕まんのなら何発でも出して、」

「いい日本男児を産んでもらうぞー！」

「んっー！んっー！んっー！んっー！」

「ああもうーダメっー！いびき、イッキまーすー！ー！」





ドエ

エズル!
エ!

「あ、「これ」で結びの「一番終わり」で「ゴワスー」
牛女のめんど肉壺……」「っっあんですー！」

「うう……お尻にもアソコにもたくさん出されちゃった」
「がっははー元気な後継ぎを生んでほしいのおー！」

「ど、どうしよう。こんなに濃厚なザーメンいっぱい出されちゃって
絶対孕んじゃったよお。避妊の秘薬を塗ればなんとかかなるかなあ……！」



ゴッポ

ゴッポッ

ピッ





















































「神月流は手コキにもぬかりはありませんわ」

「くおおおー！んな丹念な手コキ、された」となりテスー！」

「殿方のオチンポのカリのミツも、裏筋も、根元も、丹念に……」

そして華麗にスリますわよー！」

「うおーそんな優しく触られたら……」

「ほら、もう我慢できませんわね！」

はやく貴方の毒を出してしまいなさうー！」





トビッ!

トビッ!

トビッ!

「ジュープー！ジューポポー！神月流尺八術、お見せいたしますわー！」
「ぐあー！」「これはなかなかの腕前デスね」

「ジューポポー！スポポー！ん、この長尺なオチンポ、なかなかしやぶりがいがありますわね」
「うおお、私の自慢の逸物をそんな喉元までしっかりと吸い込むとは、なかなかやるデスね」
「ウフフ、こんなものではありませんわ、すぐに天国に連れてってあげますわ」





トエッ!

トエッ!

トエッ!

トエッ!



「オーホッホッホー！次は足でみじめに果てなさい！」

「ぐあああーなんという足技デスかー!?」

「わたくし的美脚で擦られればどんなチンポもイチコロですわ」

「小娘の分際で図に乗りやがって……しかしこの足「キ」は気持ちいいデス」

「ごめんあそばせ、みっともなくザーメン射精なさい！」



ビュル
ビュ!

「さあ、今度はセレブの美乳パイヌリで華麗にイキなさら」

「ふ、これはほんとゴージャスな乳なんデスか!」

「しかしあなたのチンポ、なんと長い……」

余裕で私のおっぱいを飛びだすとはやりますわね」

「うあああーだからってそんな巨乳をトコをせて擦らわすは……」

「フフ、カリ裏から根本まで、丹念にパイヌってさしあげますわ!」





ド'ビュ!

ド'ビュ!

ド'ビュ!

「オーホッホッホ……シヤドルーの幹部が惨めなモノですわ」

「ぐあああ、なんというお尻なんデスか。」

しかも「の匂い……アソコにまで香水をしてるデスか」

「フフ。貴族の嗜みですわ」

「ぐう、スンスン。しかしよく嗅げば香水に混じって雌臭のニオイが……」

「なっーそ、そんなはず……んんっ！」

「いやーな、耻めないで、いけませんわ……」





アハハアハハ
アハハハハ



ビュ!

ドビュ!

ビュワ!

「あ、あらっおかしいですね。体の動きが……鈍く」
「やっと毒が回ったようデスね。毒手だけじゃない、
私のテンポいにも毒はあるのデス！」

「ええっー？そ、そんな馬鹿な……ハマン！」

「責められるのも嫌いじゃないデスが、

やはりここは私好みで調教してこそデスよ。

まずは毒をおっぱいに塗りつけてやるデス」

「んん………そんな、いやらしく……様まないでっー」



ヒール♡

ヒール♡

ヒール♡



「んっ……シユポーシユポーグッポーグッポー」

「どっデスか？毒チンポはおいらしりデスかー」

「シユポーピチャータポ……お、**最悪の味ですわ**」

「今に毒が回ってチンポなしてやららわなくなるんスよー」『エ』『シー』

「へ、**屈辱……シユポーシユポーシユポーシユポーッー**」



ビュ!

ド'ビュ!

ビュルッ

「ぶんーぶんーぶんー」

「あんっーんんっー長いオチンポ……一番奥まで届いて、来ますわっー」

「ほらほらー愛液いっぱい出さないと」

「毒がどんどん回ってしまっテスよー」

「あんっーあんっー奥まで突かれる度、

頭の中が痺れて……んんっー変な気分ですわー」





トエエエ!

エエエ!

「ほお……」の穴の緩みも毒のせいなんデスかね？」

私の長竿をおいしそうに全部咥えちゃったデスよ」

「んんっ——ああんっ——お尻の穴大好きなんですわ——」

もっといっばい、ほじって——」

「性格のキツイ女はアナルが弱点とは本当だったんデスね！

突く度にキュッと締め付けてくるデスよ」

「ああっ——ああんっ——気持ちいい——オチンポ最高ですわ——」





ドッ! エッ!

エッ!

エッ!
ム!

「ああんっーああんっーいいっーそーいいっー」

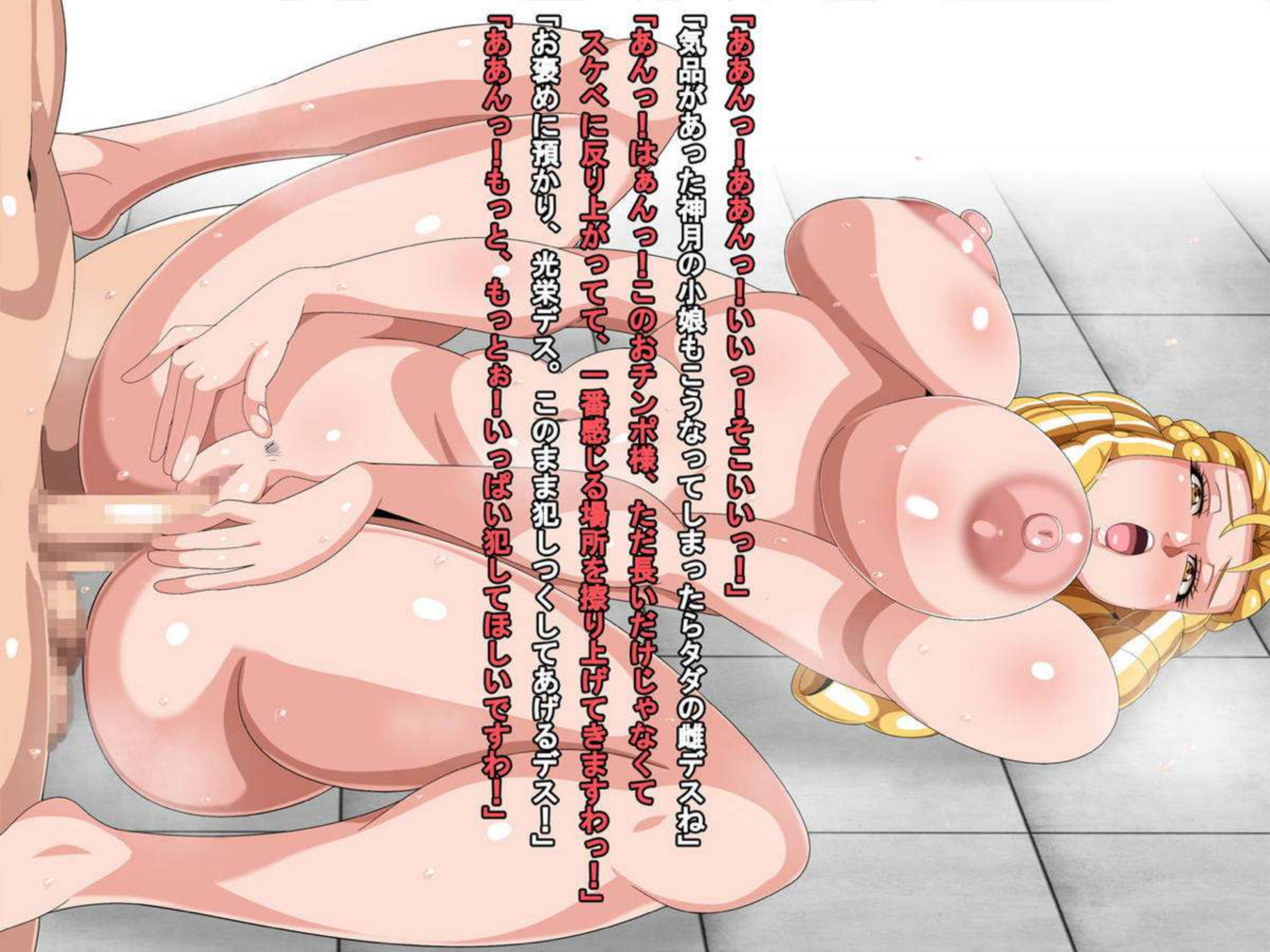
「気品があった神月の小娘も」っになってしまったらタダの雌デスね」

「あんっーはあんっー」このおチンポ様、ただ長いただけじゃなくて

スケベに反り上がってて、一番感じる場所を擦り上げてきますわっー」

「お褒めに預かり、光荣デス。」のまま犯しつくしてあげるデスー」

「ああんっーもっと、もっとおーいっばい犯してほしいですわー」





ドーン!

ドン!

ドン!

「ぶっ……アナルにもマン」にも、たくさん出してあげたデスよ」「ああっ、こんなにたくさんザーメンが……なんて量ですの？」

性欲ばかりの下賤な男……まるでケモノみたいでしたわ」

「その馬鹿にした男にやがり狂っていたのがお前デスよ！

妊娠してても知らないデスよ」

「い、いくら溢れるほどザーメンを出されたところで、

神月家当主がこんな浅はかな者のザーメンで妊娠するわけありませんわ」

「生意気な回を叩く小娘デスが、身体はなかなかハメがいがあったデスよ」



ゴボォン

フビィ



